

時間表現に関する語彙の論文目録

吉 海 直 人

目 次

- | | | | |
|----|--------------------|----|--------------------|
| 1 | 《暁・明けがた》 | 2 | 《明く・明かす・明けはつ・夜の明く》 |
| 3 | 《あけぐれ》 | 4 | 《あけほの・朝ぼらけ》 |
| 5 | 《朝・朝まだき・明日》 | 6 | 《あさげ》 |
| 7 | 《有明》 | 8 | 《いりあひ・入相》 |
| 9 | 《いさよふ・いさよひ・十六夜》 | 10 | 《鐘》 |
| 11 | 《暮る・暮らす》 | 12 | 《鶏鳴・鶏の声》 |
| 13 | 《こよひ・今夜・今宵・夜前》 | 14 | 《しののめ》 |
| 15 | 《たそがれ・かはたれ》 | 16 | 《ついたち・つごもり》 |
| 17 | 《つとめて》 | 18 | 《中の十日・十日》 |
| 19 | 《昼・夜昼》 | 20 | 《ほのほの・ほのほのと》 |
| 21 | 《夕方・夕暮・夕べ・夕まぐれ・日暮》 | 22 | 《夕月夜》 |
| 23 | 《夜半》 | 24 | 《よもすがら・夜をこめて》 |
| 25 | 《夜・夜深し・夜更け》 | 26 | 《三更・五更》 |
| 27 | 《日付変更時点》 | 28 | 《暦日》 |

1 〈暁・明けがた〉

- 1 吉澤義則「アカツキ」「シノノメ」「アケボノ」『源語釈泉』（誠和書院）昭和25年7月↓『増補版』（臨川書店）昭和48年5月
- 2 高橋亨「源氏物語の内なる物語史」国語と国文学54↓12・昭和52年12月↓『源氏物語の対位法』（東京大学出版会）昭和57年5月
- 3 西村亨「あかつき」『新考王朝恋詞の研究』（桜楓社）昭和56年1月↓（おうふう）平成6年10月
- 4 小町谷照彦「大君物語の始発——「橋姫」「椎本」の展開——」『源氏物語の歌ことば表現』（東京大学出版会）昭和59年8月
- 5 河添房江「宇治の暁」『源氏物語の探究十三』（風間書房）昭和63年7月↓『源氏物語の喩と王権』（有精堂）平成4年11月↓『源氏物語表現史』（翰林書房）平成10年3月
- 6 河添房江「源氏物語の暁——正篇の世界から——」『物語研究二』（新時代社）昭和63年9月↓『源氏物語の喩と王権』（有精堂）平成4年11月↓『源氏物語表現史』（翰林書房）平成10年3月
- 7 井深彰子「中世女流日記文学の時の語彙——明け方と朝の語彙について——」『日本文学ノート27・平成4年1月
- 8 沼田純子「和泉式部日記」の「あかつきおき」の章段について——ことばとことのは10・平成5年12月
- 9 小林賢章「日付変更時点とアカツキ」同志社女子大学学術研究年報49Ⅳ・平成10年12月↓『アカツキの研究——平安人の時間——』（和泉書院）平成15年2月
- 10 小林賢章「アカツキとヨハ」同志社女子大学総合文化研究所紀要16・平成11年3月↓『アカツキの研究——平安人の時間——』（和泉書院）平成15年2月
- 11 早川厚一「平家物語の歴史叙述の方法と構想」『平家物語を読む——成立の謎をさぐる——』（和泉書院）平成15年3月
- 12 河添房江「あかつき」『王朝語辞典』（東京大学出版会）平成12年3月
- 13 小林賢章「アケガタ考」同志社女子大学学術研究年報51Ⅳ・平成12年12月↓『アカツキの研究——平安人の時間

- (和泉書院) 平成15年2月
- 14 小林賢章「アケガタ追考」(軍記と語り物38・平成14年3月)
- 15 安藤重和「道長使用具注暦の日出入時刻と昼夜時間の「ズレ」をめぐって」(愛知教育大学日本文化論叢10・平成14年3月)
- 16 小林賢章「夕霧」の巻頭話の日時」(同志社女子大学日本語日本文学14・平成14年6月)
- 17 小林賢章「『枕草子』の新解釈——七〇段・一七三段・一七四段をめぐって——」(同志社女子大学学術研究年報53 I・平成14年12月)
- 18 小林賢章「アカツキの研究——平安人の時間」(和泉書院) 平成15年2月
- 19 阿久沢忠「定家自筆『拾遺愚草』の「あか月」——「曉(あかつき)」の表記——」(湘南短期大学紀要17・平成18年3月)
- 20 小林賢章「『我身にたどる姫君』の一節の解釈」(同志社女子大学日本語日本文学18・平成18年6月)
- 21 小林賢章「「かへるとしむ月のつかさめしに」の段試解」
- 同志社女子大学大学院文学研究科紀要7・平成19年3月
- 22 阿久沢忠「曉の月——手習の巻」(曉に到りて月徘徊す)——『源氏物語の展望1』(三弥井書店) 平成19年3月
- 23 吉海直人「『源氏物語』橋姫巻の垣間見を読む」(同志社女子大学日本語日本文学21・平成21年6月)
- 24 吉海直人「『源氏物語』夕顔巻の「曉」——聴覚の多用——」(國學院雜誌111・平成22年4月)
- 25 吉海直人「『源氏物語』東屋巻の薫と浮舟——逢瀬と道行き——」(國學院雜誌111・平成22年12月)
- 26 小林賢章「『千載和歌集』の曉の周辺」(同志社女子大学学術研究年報61・平成22年12月)
- 27 吉海直人「『嘆きつつ』歌の解釈をめぐって」(解釈57・3、4・平成23年3月) ↓『百人一首を読み直す』(新典社選書) 平成23年5月
- 28 吉海直人「空蟬物語の特殊性——曉の時間帯に注目して——」(國學院雜誌113・平成24年3月)
- 29 安永美保「『和泉式部日記』の一对幻想——手習い文章段の場合——」(同志社女子大学日本語日本文学24・平成24年6月)

30 吉海直人「大君と薫の疑似恋愛——宇治の暁に注目し
て——」立命館文学630・平成25年3月

31 吉海直人「百人一首」の「暁」考」同志社女子大学大
学院文学研究科紀要13・平成25年3月

32 小林賢章『「暁」の謎を解く』（角川選書）平成25年3月

33 大谷雅夫「椎本卷「山の端近きこちする」考」文学
1611・平成27年1月

34 保科恵「勢語四段と日附規定——ほのほのとあくる」
時刻——」二松学舎大学論集58・平成27年3月

35 小林賢章『和漢朗詠集』6番詩句の解釈」同志社女子大
学学術研究年報66・平成27年12月

36 吉海直人「書評小林賢章著『「暁」の謎を解く』」同志社
女子大学日本語日本文学28・平成28年6月

37 飯塚ひろみ「百人一首フランス語訳における夜明けの表
現——「有明」「暁」「朝ぼらけ」——」同志社女子大学
日本語日本文学30・平成30年6月

38 吉海直人「平安文学における時間表現考——暁・朝ぼ
らけ・あけぼの・しののめ——」古代文学研究第二次

27・平成30年10月

付〈暁の別れ・後朝の別れ〉

1 松井健児「『野宮』における和歌的世界と必然——源氏
物語にみる暁の別れ——」物語文学論究3・昭和53年12
月

2 長谷川範彰「後朝の別れの歌」序説」『源氏物語と和歌』
（武蔵野書院）平成20年12月

3 長谷川美奈「『源氏物語』における後朝の別れの歌」学芸
古典文学5・平成24年3月

4 長谷川範彰「『源氏物語』の「後朝の別れの歌」と「後朝
の文の歌」」『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院）平成24年10
月

5 朝日真美子「源氏物語総角巻における「暁の別れ」と漢
詩文」女子大國文54・平成26年1月

6 倉田実「男と女の後朝の儀式——平安貴族の恋愛事情
——」大妻女子大学紀要文系46・平成26年3月

7 吉海直人『源氏物語』「後朝の別れ」を読む——音と
香りにみちびかれて——』（笠間選書）平成28年12月

8 小林賢章「『陽成院親王二人歌合』の「ねぎめのこひ」と

「あかつきのわかれ」の時間」同志社女子大学学術研究年報68・平成29年12月

2 〈明く・明かす・明けはつ・夜の明く〉

- 1 小林賢章「明く」考——『源氏物語』を中心にして——」同志社女子大学学術研究年報46Ⅳ・平成7年12月
↓「アカツキの研究——平安人の時間——」（和泉書院）平成15年2月

- 2 小林賢章「夜の寢覚」の巻四、第一・二段の時間」同志社女子大学日本語日本文学20・平成20年6月

- 3 小林賢章「後拾遺和歌集」の動詞アク」同志社女子大学学術研究年報59・平成20年12月

- 4 小林賢章「蜻蛉日記」の時間表現アク、ヨ（夜）ノアク」同志社女子大学大学院文学研究科紀要9・平成21年3月

- 5 小林賢章「和歌に於けるアケヌナリ」同志社女子大学日本文学21・平成21年6月

- 6 小林賢章「芥川」の段私解——「夜の明く」ということ——」国語教室98・平成25年11月

- 7 小林賢章「アケハツ」考」同志社女子大学学術研究年報64・平成25年12月

- 8 小林賢章「浜松中納言」の時間表現」同志社女子大学学術研究年報65・平成26年12月

- 9 保科恵「勢語四段と日附規定——ほのほのとあくる」時刻——」二松学舎大学論集58・平成27年3月

- 10 小林賢章「平中物語」のアク・ヨノアク——付『枕草子』七九段の方違えの解釈——」同志社女子大学大学院文学研究科紀要16・平成28年3月

3 〈あけぐれ〉

- 1 細田恵子「八代集のありあけのイメージ」文学史研究15・昭和49年7月

- 2 小島繁一「源氏物語交情の時空とその変容——やつし・まどひ・あけぐれ——」同志社国文学21・昭和57年12月

- 3 上野英子「源氏物語に於ける「夢」の表徴——特に紫上臨終時の「明けぐれの夢」をめぐって——」実践国文学25・昭和59年3月

- 4 木村正中「明け暗れの空」短歌・昭和60年2月↓『中古文

- 学論集四(おうふう) 平成14年7月
 5 添田健治郎「万葉集「明晩」「明闇」訓読考」山口国文学
 8・昭和60年3月
 6 井深彰子「中世女流日記文学の時の語彙——明け方と朝の語彙について——」日本文学ノート27・平成4年1月
 7 小林賢章「アリアケとアケグレ」同志社女子大学総合文化研究所紀要17・平成12年3月↓『アカツキの研究——平安人の時間——』(和泉書院) 平成15年2月
 8 久保田淳「ことばの森(22)——あけぐれ(明け暗)」日本語学24—1・平成17年1月
4 〈あけぼの・朝ぼらけ〉
 1 上野理「春曙」考」文芸と批評2—8・昭和43年4月
 2 吉澤義則「アカツキ」「シノノメ」「アケボノ」『源語釈泉』(誠和書院) 昭和25年7月↓『増補版』(臨川書店) 昭和48年5月
 3 小山敦子「源氏物語語彙と解釈」国文学3—5・昭和33年5月
 4 石田穰二「あけぼの」と「朝ぼらけ」学苑290・昭和39年2月↓『源氏物語論集』(桜楓社) 昭和46年11月
 5 今西浩子「あけぼのの周辺」昭和学院短期大学紀要4・昭和43年3月
 6 池田亀鑑「朝」『平安時代の文学と生活』(至文堂) 昭和53年6月
 7 稲賀敬二「枕草子・大鏡」(尚学図書鑑賞日本の古典5) 昭和55年5月
 8 東みづほ「あけぼの」考」学習院大学国語国文学会誌19・昭和50年12月
 9 徳原茂実「朝ぼらけ有明の月と見るまでに」武庫川国文学22・昭和58年11月↓『古今和歌集の遠景』(和泉書院) 平成17年4月↓『百人一首の研究』(和泉書院) 平成27年9月
 10 中島千恵子「日本文学のあけぼの」早文会論集13・平成10年1月
 11 上野辰義「春はあけぼの」と「春のあけぼの」——枕草子第一段雑考——」京都語文8・平成13年10月
 12 岡内弘子・大黒香奈「春はあけぼの」をめぐって——

- 清少納言の意識を探る——」香川大学教育学部研究報告
115・平成14年3月
- 13 堀井令以知「曙としののめ」『ことばの由来』岩波新書・平成17年3月
- 14 宮崎莊平「春はあけぼの」とその周辺——清少納言・紫式部の対比にも触れて——」芸文攷11・平成18年2月
↓『王朝女流文学論攷』（新典社）平成22年10月
- 15 伊藤夏穂「薫の「朝ぼらけ」詠——音を聞く時——」國學院大學大学院文学研究科論集37・平成22年3月
- 16 小林賢章「アサボラケ考」同志社女子大学学術研究年報63・平成24年12月
- 17 久保田淳「藤原俊成の「あけぼの」の歌について——歌ことば「あけぼの」に関連して——」日本学士院紀要70-1・平成27年9月
- 18 飯塚ひろみ「百人一首フランス語訳における夜明けの表現——「有明」「暁」「朝ぼらけ」——」同志社女子大学日本語日本文学30・平成30年6月
- 19 吉海直人「平安文学における時間表現考——暁・朝ぼらけ・あけぼの・しののめ——」古代文学研究第二次
- 27・平成30年10月
- 20 小林賢章「アサマダキ・アケボノ考」同志社女子大学学術研究年報69・平成30年12月
- 5 〈朝・朝まだき・あした・明日〉
- 1 岩城準太郎「黄昏から黎明まで」国語と国文学2-10・昭和元年10月
- 2 池田龜鑑「朝」『平安時代の文学と生活』（至文堂）昭和53年6月
- 3 遠藤好英「記録体における「朝」の語彙——『後一条師通記』の場合——」国語学研究19・昭和54年12月
- 4 稲岡耕二「万葉集の「今夜」・「明日」について」国際日本文学研究集会会議録11・昭和63年3月
- 5 井深彰子「中世女流日記文学の時の語彙——明け方と朝の語彙について——」日本文学ノート27・平成4年1月
- 6 市井外喜子「あした」の周辺」大東文化大学紀要人文科学30・平成4年3月
- 7 西村真一「和歌における「夜」から「朝」へ」文学芸術

- 24・平成12年7月
 8 米山忠雄「『明日早朝』考」解釈46―9、10・平成12年10月

- 9 河野真奈美「明日の道ゆく旅人——『玉葉集』における『明日』を中心に——」解釈50―3、4・平成16年4月

- 10 日野資純「『アサユフ（朝夕）』か、『アシタユフベ（朝夕）』か——今昔物語集の異訓——」日本語の研究27・平成18年10月

- 11 井出至「ゆふへの逢ひ、今日のおした」——時間帯を表わす上代語「ゆふへ、よひ、あした」をめぐって——」万葉集研究28・平成18年11月

- 12 秋澤互「中の君の新枕の朝——『源氏物語』総角巻八月二十九日早朝の時間矛盾——」國學院大學大学院平安文学研究2・平成22年9月

- 13 小林賢章「アサマダキ・アケボノ考」同志社女子大学学術研究年報69・平成30年12月

6 〈あさけ〉

- 1 小林賢章「『アサケ（朝明）』考」『日本文学史論』（世界

- 思想社）平成9年9月
 2 山口正代「夕霧の『朝明の姿』」島大國文31・平成17年3月

7 〈有明〉

- 1 細田恵子「八代集のありあけのイメージ」文学史研究15・昭和49年7月

- 2 小林信子・蒲野淳子「有明の月——和泉式部日記ノト——」東京成徳國文4・昭和57年3月

- 3 北沢初美「『枕草子』の月——有明の月について——」枕草子探求2・昭和57年7月

- 4 小林賢章「アリアケとアケグレ」同志社女子大学総合文化研究所紀要17・平成12年3月↓アカツキの研究——平安人の時間——」（和泉書院）平成15年2月

- 5 小林賢章「『枕草子』「月は」（三三四）段の解釈——アリアケとは——」同志社女子大学大学院文学研究科紀要4・平成16年3月

- 6 鎌田清栄「平安人の見ていた有明の月を追って」古代中世國文学24・平成20年3月

- 7 渡辺開紀「応永本『和泉式部物語』の矛盾——「十余日ばかりの有明の月」の表現をめぐって——」『國學院大學大学院平安文学研究1・平成21年9月』
- 8 小林賢章「『徒然草』のアリアケの周辺」同志社女子大学学術研究年報56・平成17年12月
- 9 飯塚ひろみ「百人一首フランス語訳における夜明けの表現——「有明」「暁」「朝はらけ」——」同志社女子大学日本語日本文学30・平成30年6月

8 〈いりあひ・入相〉

- 1 劉小俊「古典和歌における「鐘」の意象（その一）——暁の鐘と入相の鐘——」岡大國文論稿30・平成14年3月
↓『古典和歌における鐘の研究』（風間書房）平成18年12月
- 2 小林賢章「イリアヒ考」同志社女子大学日本語日本文学19・平成19年6月
- 3 劉小俊「古典和歌における「いりあひ」の用法」『工藤進思郎先生退職記念論文・随筆集』（記念の会）平成21年7月

9 〈いさよふ・いさよひ・十六夜〉

- 1 富倉二郎「「いさよふ月」と「あぢきなきその名」と」『国語解釈1-4・昭和11年5月』
- 2 西丸光子「平安時代の文学と月——望月、いざよひの月、立待月、居待月、寝待月——」日本女子大学国語国文学論究2・昭和46年2月
- 3 石田穰二「十六夜の月、砧の音」学苑1・昭和48年1月
↓『源氏物語攷その他』（笠間書院）平成元年7月
- 4 菅野洋一「「いさよふ月にさそはれ」の解釈」解釈30-8・昭和59年8月
- 5 田坂憲二「かの十六夜のさやかならざりし秋の事」いずみ通信9・昭和61年11月↓「十六夜の月・二十日の月」『源氏物語の人物と構想』（和泉書院）平成5年10月
- 6 田村俊介「かの十六夜の女君——葵卷晩秋の新解釈——」『中古文学47・平成3年5月』
- 7 清水婦久子「源氏物語における「いさよひ」の風景」青須我波良54・平成10年12月
- 8 清水婦久子「山の端の」歌の解釈」『源氏物語の風景と

和歌』(和泉書院) 平成12年9月

9 吉海直人「「いさよふ月」と「いさよひの月」——『源氏物語』夕顔卷の一考察——」古代文学研究第二次14・平成17年10月

10 清水婦久子「山の端」と「月」『光源氏と夕顔』(新典社新書) 平成20年4月

11 吉海直人「『源氏物語』「いさよふ月」考」(教室の内外(3) 所収) 同志社女子大学日本語日本文学24・平成24年6月↓『源氏物語』の特殊表現』(新典社選書) 平成29年2月

10 〈鐘〉

1 馬場(清水)婦久子「源氏物語の和歌表現——その位置、『秋風』「鐘の声」を中心に——」女子大文学31・昭和55年3月

2 柚山淳子「中世文学における鐘の音——音の表現と捉え方——」愛文20・昭和59年7月

3 相沢雅子「『源氏物語』宇治十帖における聴覚表現——「鐘の音」を中心に——」共立レビュー30・平成14年2

月

4 劉小俊「古典和歌における「鐘」の意象(その二)——晝の鐘と入相の鐘——」岡大國文論稿30・平成14年3月

5 劉小俊「古典和歌における「鐘」の意象(その二)——聴覚素材としての特徴——」岡大國文論稿31・平成15年3月

6 劉小俊「古典和歌における「鐘」の意象(その三)——鐘の宗教性——」岡大國文論稿32・平成16年3月

7 小林賢章「アカツキの研究——平安人の時間——」(和泉書院) 平成15年2月

8 劉小俊「日中古典詩歌における鐘の比較文化的研究」同志社女子大学学術研究年報56・平成17年12月

9 劉小俊「古典和歌における鐘の研究」(風間書房) 平成18年12月

10 高野祥子「王朝女流日記文学における「鐘の音」の機能——作品的特質との関わりをめぐって——」日本大学大学院総合社会情報研究科紀要7・平成19年2月

11 阿部好臣「源氏物語に響く「鐘」の音」語文131・平成20年6月

12 安道百合子「鐘の音」に「音を添へるとき」古代中世

国文学23・平成19年3月

13 小林賢章「時鐘」『日蓮教学教団史論集』（山喜房佛書林）

平成22年3月

14 小林賢章『暁』の謎を解く』（角川選書）平成25年3月

11 〈暮る・暮らす〉

1 見尾久美恵「和歌にみられる「暮る」の表現——新古

今歌人の時間意識——」赤羽淑先生退職記念論文集・平

成17年3月

2 小林賢章「クル、クラス考」同志社女子大学学術研究年

報60・平成21年12月

12 〈鶏鳴・鶏の声〉

1 折口信夫「鶏鳴と神楽と」『折口信夫全集二古代研究』

（中央公論社）昭和30年4月

2 室田浩然「鶏鳴の系譜（二）」解釈3―5・昭和32年5月

3 室田浩然「鶏鳴の系譜（二）」解釈3―9・昭和32年9月

4 益田勝美「黎明」『火山列島の思想』（筑摩書房）昭和43

年7月

5 吉澤義則『増補源語釈泉』（臨川書店）昭和48年5月

6 上野英子『源氏物語』における「鶏鳴」の意味——古

代鶏鳴観の継承とその文学的深化——」実践国文学23・

昭和58年3月

7 鈴木日出男「鶏」国文学39―12（古典文学動物誌）・平成

6年10月

8 林田孝和「女三の宮の結婚——鶏の声を起点に——」

『論集平安文学4』（勉誠出版）平成9年9月↓『源氏物語

の創意』（おうふう）平成23年4月

9 高鳴和子「源氏物語動物考（その二十）——鶏——」並

木の里48・平成10年6月↓『源氏物語動物考』（国研出版）

平成11年5月

10 内藤明「『万葉集』に鳴く鳥」『音の万葉集』（笠間書院）

平成14年3月

11 広瀬唯二「夕顔の巻の物の怪をめぐって——物の怪と

鳥の声——」武庫川国文61・平成15年3月

12 山本利達「日の始まりは寅の刻説存疑」『中古文学攷』

（清文堂書店）平成15年10月

- 13 神尾暢子「蜻蛉時鳥の鳴声映像」学大國文47・平成16年3月
 - 14 野田真吾「『蜻蛉日記』の聴覚表現——鳥の声、虫の音を中心に——」駒沢大学大学院国文学会論輯23・平成17年5月
 - 15 佐藤敬子「源氏物語の鶏鳴」松籟1・平成18年12月
 - 16 松井健児「をりしも時鳥鳴きて渡る——『花散里』の巻から——」むらさき43・平成18年12月
 - 17 朴喜淑「万葉集の『鳴く鳥』——『鳴く鳥』を歌うことの意味について——」百舌鳥國文22・平成23年3月
 - 18 鈴木道代「夜明けを告げる鳥」上代歌謡研究1・平成25年2月
 - 19 倉田実「男と女の後朝の儀式——平安貴族の恋愛事情——」大妻女子大学紀要文系46・平成26年3月
 - 20 趙情情「記紀の『長鳴鳥』説話について——鶏鳴と太陽の関係を中心に——」解釈62-11、12・平成28年11月
- 13** 〈こよひ・今夜・今宵・夜前〉
- 1 橋本万平『日本の時刻制度』（増選書）昭和41年9月
 - 2 井手至「上代の人々の一日に対する考え方について」武智雄「先生退官記念国語国文学論集・昭和47年2月」
 - 3 遠藤好英「平安時代の記録語の性格——『夜前』をめぐって——」国語学100・昭和50年3月
 - 4 神野志隆光「古代時間表現の一問題——古事記覚書——」『論集上代文学』（笠間書院）昭和51年3月
 - 5 池田龜鑑「夜」『平安時代の文学と生活』（至文堂）昭和53年6月
 - 6 齊藤国治「日本上代の日始の時刻について」古代文化33-12・昭和56年2月↓『古代の時刻制度——古天文学による検証——』（雄山閣出版）平成7年4月
 - 7 伊地知鐵男「昼と夜の変わり目」汲古1・昭和57年5月↓『伊地知鐵男著作集I』（汲古書院）平成8年5月
 - 8 小林賢章「『平家物語』の日付変更時刻」軍記と語り物22・昭和61年3月↓『アカツキの研究——平安人の時間——』（和泉書院）平成15年2月
 - 9 井手至「古代語『こよひ』の意味用法をめぐって」人文研究38・昭和61年12月
 - 10 岡崎正継「今昔物語の『今夜』と『夜前』と」國學院雜

誌87-9・昭和62年9月↓『中古中世語論攷』（和泉書院）
平成28年5月

11 稲岡耕二「万葉集の「今夜」・「明日」について」国際日
本文学研究会会議録11・昭和63年3月

12 伊地知鐵男「古代の一日の始まりと沐浴回数」武蔵野文
学37・平成2年1月

13 玉村禎郎「中世後期の時を表す語彙——『太平記』の
「今朝」「今夜」などをめぐって——」待兼山論叢27・平
成5年12月

14 佐々木恵雲「『源氏物語』における「こよひ」考」南山短
期大学紀要21・平成5年12月

15 小林賢章「日付変更時点と今夜」『国語語彙史の研究十
六』（和泉書院）平成8年10月↓『アカツキの研究——
平安人の時間——』（和泉書院）平成15年2月

16 八嶋正治「昨夜（よべ）」と「今宵（こよい）」日本歴
史584・平成9年1月

17 山本利達「日の始まりは寅の刻説存擬」奈良大学研究紀
要26・平成10年3月↓『中古文学攷』（清文堂出版）平成
15年10月

14 〈しののめ〉

1 吉澤義則「アカツキ」「シノノメ」「アケボノ」『源語釈
泉』（誠和書院）昭和25年7月↓『増補版』（臨川書店）昭
和48年5月

2 井手至「しののめ・いなのみ」攷——原始的住居と
「め」——『万葉20・昭和31年7月

3 石田穰二「あけぼの」と「朝ぼらけ」学苑290・昭和39
年2月↓『源氏物語論集』（桜楓社）昭和46年11月

4 上野辰義「源氏物語にみえる「しののめ」の歌」むらさ
き38・平成13年12月

5 堀井令以知「曙としののめ」『ことばの由来』岩波新書・
平成17年3月

6 久保田淳「ことばの森（25）27」——東雲（しののめ）
一〜三」日本語学24-5〜7・平成17年4月〜6月

7 吉海直人「平安文学における時間表現考——暁・朝ぼ
らけ・あけぼの・しののめ——」古代文学研究第二次
27・平成30年10月

15 〈たそがれ・かはたれ〉

- 1 石井博「カハタレ(彼誰)とタソガレ(黄昏)」人文社会科学研究36・平成8年3月
- 2 玉村禎郎「たそがれ」の語史」光華日本文学6・平成10年8月
- 3 久保田淳「ことばの森(23)——かはたれ時・かはたれ」日本語学24-2・平成17年2月
- 4 小林賢章「タソカレドキ考」同志社女子大学大学院文学研究科紀要10・平成22年3月

16 〈ついたち・つごもり〉

- 1 松岡浩一「三月朔日巳の日の類と源氏物語成立年時——否定的結果の報告——」平安文学研究4・昭和25年7月
- 2 安田尚道「和数詞による暦日表現と「ついたち」の語源」国語と国文学51-2・昭和49年2月
- 3 竹村義一「源氏物語「月立つ」考——古代人の時間意識に関連して——」甲南女子大学研究紀要10・昭和49年3月

- 4 内山守常「日本書紀朔日考(上)」横浜市立大学論叢27-1・昭和50年10月

- 5 小島憲之「四季語を通して——「尽日」の誕生——」国語国文46-1・昭和52年1月

- 6 伊坂淳一「つごもり(晦日)のはなし」存疑」国語国文56-3・昭和62年3月

- 7 小池正胤「つごもり大つごもり——月と闇と人間——」高校通信東書国語298・平成元年12月

- 8 周防朋子「平安朝における「つごもり」について——「尽日」意識との関わり——」甲南大学紀要(文学編)119・平成13年3月

- 9 森本直子「古今集における漢文学の日本的受容——「弥生」のつごもり」・「長月のつごもり」歌について——」学院大学人文科学論集10・平成13年9月

- 10 神尾暢子「期間規定と時点規定——「ついたち」と「つごもり」——」『伊勢物語の成立と表現』(新典社)平成15年1月

17 〈つとめて〉

- 1 米山忠雄「明日早朝」考」解釈46―9、10・平成12年10月
- 2 小林賢章「ツトメテ考」同志社女子大学学術研究年報54 I・平成15年12月
- 3 秋沢互「中の君の新枕の朝——『源氏物語』総角巻八月二十九日早朝の時間矛盾——」國學院大学大学院平安文学研究2・平成22年9月

18 〈中の十日・十日〉

- 1 原田芳起「中の十日」の意義をめぐる問題」『平安時代文学語彙の研究』（風間書房）昭和37年9月
- 2 高松政雄「中の十日」考」解釈12―4・昭和41念4月
- 3 原田芳起「中古文学語彙雑考（五）——「中の十日」の語義補説——」平安文学研究54・昭和50年11月
- 4 武山隆昭「中の十日」の語義攷」椋山女学園大学研究論集8―2・昭和52年2月
- 5 神尾暢子「暦日規定の映像定着——竹取物語と伊勢物

時間表現に関する語彙の論文目録

- 語——」『王朝国語の表現映像』（新典社）昭和57年4月
- 6 小林賢章「夕霧」の巻頭話の日時」同志社女子大学日本語日本文学14・平成14年6月
- 7 神尾暢子「暦日映像と体制批判——時点規定の正月十日——」『伊勢物語の成立と表現』（新典社）平成15年1月

19 〈昼・夜昼〉

- 1 池田龜鑑「昼」『平安時代の文学と生活』（至文堂）昭和53年6月
- 2 長谷川政春「物語の夜・物語の昼——『堤中納言物語』序説——」東横国文学21・平成元年3月
- 3 佐竹昭広「昼か夜か——『万葉集』巻二、一三三の歌など——」『折口学と古代学』（慶應義塾大学国文学研究会）平成元年11月
- 4 厚谷和雄「奈良・平安時代に於ける漏刻と昼夜四十八刻制」『東京大学史料編纂所研究紀要4・平成6年3月』
- 5 臈谷寿「王朝の昼と夜——貴族たちの美意識と日常生活——」『雅——王朝の原像1』（講談社）平成6年3月

月

- 6 小林賢章「夜昼」考『日本語の研究』（明治書院）平成7年11月↓「アカツキの研究——平安人の時間——」（和泉書院）平成15年2月
 - 7 伊地知鐵男「昼と夜の変わり目」汲古1・昭和57年5月↓「伊地知鐵男著作集I」（汲古書院）平成8年5月
 - 8 青木毅「平安・鎌倉時代における類義動詞句「夜ヲ昼ニ成ス」と「夜ヲ日ニ継グ」との交替について」徳島文理大学文学論叢14・平成9年3月
 - 9 井手至「万葉びとの心性から見た昼夜のけじめ——」日の意識をめぐる——『時の万葉集』（笠間書院）平成13年3月
 - 10 安藤重和「道長使用暦注の日出入時刻と昼夜時間の「ズレ」をめぐる」日本文化論叢10・平成14年3月
 - 11 日野資純「古典語「ヒル（昼）」の語義・用法」日本語の研究8-1・平成24年1月
- 20** くほのほの・ほのほの（い）
- 1 小嶋孝三郎「ほのほのと」「ほのほの」攷——平安朝物語日記等における用例に基づいて——立命館文学170、171・昭和34年8月
 - 2 小嶋孝三郎「和歌における情趣的用語の考察——「ほのほの（と）」の用例に基づいて——」立命館文学176・昭和35年1月
 - 3 河原寛「ほのほのと」覚書」園田学園女子短大芸芸10・昭和49年3月
 - 4 石川常彦「ほのほの」考——新古今の情趣構成の論のために——」国語国文43-7・昭和49年7月
 - 5 長江稔「ほのほのと」考——新古今集、後鳥羽院の御歌について——」解釈27-6・昭和56年6月
 - 6 東郷吉男「ほのほの」と「ほのほのと」——平安時代の用例を中心に——」解釈27-12・昭和56年12月
 - 7 保科恵「勢語四段と日附規定——ほのほのとあくる」時刻——」二松学舎大学論集58・平成27年3月
- 21** 夕方・夕暮・夕べ・夕まぐれ・日暮
- 1 岩城準太郎「黄昏から黎明まで」国語と国文学2-10・昭和元年10月

- 2 原田芳起「語彙事実としての対義語朝霧・夕霧・夜霧」『平安時代文学語彙の研究』（風間書房）昭和37年9月
- 3 今井福治郎「夕暮の系譜」國學院雜誌65―8、9・昭和39年9月
- 4 福島行一「万葉集の夕暮の歌」防衛大学校紀要12・昭和41年3月
- 5 諸井康子「日本古代文学における夕日の心象——夕日詠の成立をめぐる——」
- 6 遠藤好英「記録体における「夕方」の語彙の体系——後二条師通記の場合——」国語と国文学55―5・昭和53年5月
- 7 池田亀鑑「夕」『平安時代の文学と生活』（至文堂）昭和53年6月
- 8 中山緑朗「記録体の語彙——『小右記』朝、夕方、夜の語彙——」学苑493・昭和56年1月
- 9 河添房江「源氏物語における夕べ——その表現史的累層——」むらさき19・昭和57年7月
- 10 三方達一「古典和歌における「秋の夕暮」「夕暮」筑紫女学園短期大学紀要18・昭和58年3月
- 11 今西祐一郎「ひぐれ」攷『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』（桜楓社）平成元年6月
- 12 松村佳奈子「八代集における「夕暮」の歌について」学智院大学国語国文学会誌40・平成9年3月
- 13 佐藤武義「上代語「日暮」「夕暮」考」桜文論叢51・平成12年8月
- 14 伊井春樹「源氏物語の表現——空の描写と夕暮れの季節——」本文研究3・平成12年8月
- 15 日野資純「アサユフ（朝夕）か、「アシタユフベ（朝夕）か——今昔物語集の異訓——」日本語の研究27・平成18年10月
- 16 井手至「ゆうへの逢ひ、今日のあした——時間帯を表わす上代語「ゆうへ、よひ」をめぐる——」万葉集研究28・平成18年11月
- 17 小林賢章「ユフグレ考」同志社女子大学学術研究年報58・平成19年12月
- 22 〈夕月夜〉
- 1 西丸光子「三日月と夕月夜——平安時代の文学素材と

しての位置と性格——」国文目白8・昭和44年3月

2 佐藤美和子「夕月夜潮みちくらし考」あけぼの5-2・

昭和47年4月

3 館入靖枝「夕月夜の隠し絵——七夕伝説と末摘花・雲

居雁——」物語研究5・平成17年3月

4 館入靖枝「続・夕月夜の隠し絵——末摘花から浮舟へ

(七夕伝説を紐帯として)——」『源氏物語〈読み〉の交

響』(新典社)平成20年11月

23 〈夜半〉

1 阪倉篤義「『よるの寢覚』と『よはの寢覚』」国語国文

33-10・昭和39年10月

2 柏木由夫「『よは』の語義をめぐって」平安文学研究73・

昭和60年6月

3 柏木由夫「歌語『よは(夜半)』について——後拾遺集

を中心にして——」和歌文学研究51・昭和60年10月

4 小林賢章「アカツキとヨハ」同志社女子大学総合文化研

究所紀要16・平成11年3月↓『アカツキの研究——平安

人の時間——』(和泉書院)平成15年2月

24 〈よもすがら・夜をこめて〉

1 阪倉篤義「『しらみ』と『すがら』——ひねもす・ヨモ

スガラの意味——」万葉41・昭和36年10月

2 福井照之「和泉式部日記「窓うつ雨の音」考——「よも

すがら」の歌の作歌事情——」山口大学教育学部研究論

叢人文科学社会科学17・昭和43年3月

3 峰岸明「『よもすがら』用字考——平安時代記録資料を

対象として——」国語と国文学49-6・昭和47年6月

4 日野資純「『よひとよ』と『よもすがら』——古典の解

釈における方言の応用——」静大国文28・昭和58年2月

5 小林賢章「ヨモスガラ考」同志社女子大学学術研究年報

50 IV・平成11年12月↓『アカツキの研究——平安人の時

間——』(和泉書院)平成15年2月

6 小林賢章「『源氏物語』のヨモスガラ」同志社女子大学学

術研究年報57・平成18年12月

7 吉海直人「清少納言歌(六二番)の背景——行成との

擬似恋愛ゲーム——」『百人一首を読み直す』(新典社選

書)平成23年5月

- 8 小林賢章「「夜をこめて」考」同志社女子大学学術研究年報62・平成23年12月
- 9 吉海直人「教室の内外(3)——『枕草子』・『和泉式部日記』・『源氏物語』二題・『徒然草』——」所収『枕草子』頭弁の、職にまゐりたまひて」章段について」同志社女子大学日本語日本文学24・平成24年6月

25 〈夜・夜深し・夜更け〉

- 1 小泉立身「まだ夜深きほどの」国文学8―6・昭和38年5月
- 2 池田亀鑑「夜」『平安時代の文学と生活』(至文堂) 昭和53年6月
- 3 加納重文「平安貴族の夜——『源氏物語』鑑賞によせて——」解釈と鑑賞45―5・昭和55年5月
- 4 中山緑朗「記録体の語彙——『小右記』朝・夕方・夜の語彙——」学苑493・昭和56年1月
- 5 小松光三「「夜深し」考」愛文19・昭和88年7月
- 6 多田一臣「古代人と夜」千葉大学語文論叢15・昭和62年
- 7 近藤信義「古代の一日と「ぬばたまの夜」(前編)」立正

- 大学文学部研究紀要4・昭和63年3月
- 8 近藤信義「古代の一日と「ぬばたまの夜」(後編)」立正大学文学部研究紀要5・平成元年3月
- 9 厚谷和雄「奈良・平安時代に於ける漏刻と昼夜四十八刻制」東京大学史料編纂所研究紀要4・平成6年3月
- 10 小林賢章「「夜昼」考」『日本語の研究』(明治書院) 平成7年11月↓『アカツキの研究——平安人の時間——』(和泉書院) 平成15年2月
- 11 林田孝和「源氏物語の夜——恋の時空——」むらさき34・平成9年12月↓『源氏物語の創意』(おうふう) 平成23年4月
- 12 井出至「万葉びとの心性から見た昼夜のけじめ——一日の意識をめぐって——」『時の万葉集』(笠間書院) 平成13年3月
- 13 吉海直人「『源氏物語』「夜深し」考——後朝の時間帯として——」古代文学研究第二次19・平成22年10月↓『源氏物語』「後朝の別れ」を読む——音と香りにみちびかれて——』(笠間選書) 平成28年12月
- 14 小林賢章「かささぎの…」の歌の詠歌時間——「夜ぞ

更けにける」の解釈——同志社女子大学日本語日本文学26・平成26年6月

15 吉海直人「小夜更けて」考」解釈61―9、10・平成27年10月1日

15 小林賢章「妖怪の活躍時間」同志社女子大学学術研究年報67・平成28年12月

26 〈三更・五更〉

1 藤原芳男「織女の袖続く三更の」神戸女子大学紀要1・昭和45年3月

2 近藤信義「万葉集の時間表記とその表現——「三更」の訓から——」立正大学国語国文24・昭和63年3月

3 川島二郎「三更刺而」考」山辺道36・平成4年3月

4 小林賢章「五更考——更点法——」同志社女子大学日本文学30・平成30年6月

27 〈日付変更時点〉

1 橋本万平『日本の時刻制度』（塙選書）昭和41年9月

2 齊藤国治「日本上代の日始の時刻について」古代文化

33―2・昭和56年2月↓「古代の時刻制度——古天文学による検証——」（雄山閣出版）平成7年4月

3 小林賢章「『平家物語』の日付変更時刻」軍記と語り物22・昭和61年3月↓「アカツキの研究——平安人の時間——」（和泉書院）平成15年2月

4 小林賢章「万葉の日付変更時刻」語文66・平成8年7月↓「アカツキの研究——平安人の時間——」（和泉書院）平成15年2月

5 小林賢章「日付変更時刻と今夜」『国語語彙史の研究16』（和泉書院）平成8年10月

6 小林賢章「日付変更時点とアカツキ」同志社女子大学学術研究年報49Ⅳ・平成10年12月↓「アカツキの研究——平安人の時間——」（和泉書院）平成15年2月

7 勝俣隆「一日の境目午前三時に出現する鬼と幽霊」いずみ通信35・平成19年5月

8 小林賢章「『万葉集』の日付変更時点と言うこと」同志社女子大学総合文化研究所紀要27・平成22年3月

28 〈暦日〉

- 1 進士慶幹「時刻」解釈と鑑賞20—4・昭和30年4月
- 2 橋本万平「古文に現れた時刻法について」国語と国文学35—8・昭和33年8月
- 3 丸山林平「時刻法の変遷について——古典理解のため——」国文学4—14・昭和34年11月
- 4 中野幸一「紫式部日記における二三の疑問——史実と暦日を中心として——」学術研究14・昭和40年12月
- 5 田中元「古代人の時間意識」(吉川弘文館) 昭和50年
- 6 平野仁敬「古代日本人の時間意識」『続古代日本人の精神構造』(未来社) 昭和51年11月
- 7 内田正男「古典文学の周辺(一) 暦日にふれて」日本古典文学会々報49・昭和52年4月
- 8 池田亀鑑「朝」『平安時代の文学と生活』(至文堂) 昭和53年6月
- 9 広瀬秀雄「暦と時の事典」(雄山閣) 昭和53年3月↓新装版(東京堂出版) 平成5年9月
- 10 永藤靖「『記紀』に現われた夜と昼の世界」『古代日本文学と時間意識』(未来社) 昭和54年3月
- 11 神尾暢子「暦日規定の表現映像——竹取物語を資料として——」『初期物語文学の意識論集中古文学』(笠間書院) 昭和54年5月
- 12 中村昭「左注万葉の成立——暦日からみた万葉集の原産その一——」万葉研究4・昭和54年12月
- 13 神尾暢子「伊勢物語と暦日表現——暦日規定の表現映像——」学大国文23・昭和55年1月
- 14 神尾暢子「勢語表現と暦日規定——期間規定と時点規定——」学大国文24・昭和56年2月
- 15 神尾暢子「暦日規定の映像定着——竹取物語と伊勢物語——」『王朝国語の表現映像』(新典社) 昭和57年4月
- 16 安藤亨子「枕草子の明暗——二、六、十月の暦日表現をめぐって——」和洋国文学19・昭和59年3月
- 17 内田正男「暦と時の事典」(雄山閣) 昭和61年5月
- 18 室井努「平安朝の和語「暦日」について」『文芸研究』13・平成5年5月
- 19 武井睦雄「『土佐日記』における暦日表記例はどのような『よみ』を期待されているか」『聖徳大学研究紀要』30・平成

9年12月

20 室井努「江戸期における古代の暦日表現観（上）——土

左日記の日付の読み方をめぐって——」弘学大語文25・

平成12年3月

21 上村希「『伊勢物語懷中抄』題一一七段における暦日表

現」國學院大學近世文学学会報7・平成13年3月

22 吉住弘恵「日記文学における暦日表現についての一考察

——「方違え」で読む『蜻蛉日記』——」日本文学研究

37・平成14年3月

23 室井努「土左日記の暦日「はつかあまりひとひのひ」に

ついでの考察」金沢大学国語国文35・平成22年3月

24 湯浅吉美「前近代日本人の時間意識」埼玉学園大学人間

学部篇15・平成27年12月

25 深沢瞳「『蜻蛉日記』下巻における藤原遠忠の求婚と暦日

意識——藤原実資女・千古の場合を例として——」武

蔵野大学日本文学研究所紀要5・平成29年9月

* 本目録は、小林賢章先生から刺激とヒントを頂いて試みに

編んだものである。今後、こういった方面への関心・研究

が一層高まることを期待したい。